収蔵資料紹介

赤野井湾遺跡出土　土製人形

弥生時代後期～古墳時代中期（三～五世紀）
高九・〇㎝

守山市の湖岸に所在する赤野井湾遺跡では、縄文時代早期から中世にいたる幅広い時代の遺物が出土しました。中でも弥生時代後期～古墳時代中期にかけての土器や木製品は大量に出土していて、本紙でもこれまでにいくつかご紹介しています。

今回ご紹介する土製人形も、弥生時代後期～古墳時代中期の遺物を含む遺物包含層から出土しました。高さは九㎝、粘土の塊から簡単につまみ出して作成したような姿です。頭部と手足があり、自立することから、人体造形を指向していることはわかります。しかし、性別や役割を示すような表現が見られないため、何を意図して製作されたものなのかはまったく不明です。類例としては、静岡県磐田市の明ヶ島五号墳、福岡県志摩町の御床松原遺跡などがあり、いずれも古墳時代のものと考えられています。

こういった人体を指向した造形物は、縄文時代には土偶としてたくさん作られていました。それらは、まるで精霊を表現したかのような、不思議な造形や表現を持っています。ところが弥生時代になると、そういった造形物はほぼ消滅し、土偶型容器や木偶といった遺物が散発的に見られる程度になってしまいます。続く古墳時代中期には、人物埴輪として再び人体を表現する造形物が現れてきますが、縄文時代の土偶とは異なり、写実的な表現を持つものでした。そのような時期に現れるこの土製人形は、土製模造品として報告されています。土製模造品とは古墳の副葬品にも見られる、鏡や玉などを粘土で模して作ったものです。前述の明ヶ島五号墳や御床松原遺跡での出土例では一〇点以上がまとまって出土しており、簡素な作りなものが多く、土製人形もその一種と捉えられています。

この赤野井湾遺跡出土例も同様なものと考えられますが、単独で出土していること、付近に古墳が見られないことなどから、意図や意味を持って作成されたものではなく、手慰みに作った、あるいは遊具、という可能性も考えられます。土偶・木偶といった抽象的造形物が消滅した後に登場した、不思議な造形物です。

赤野井湾遺跡出土　土製人形